

晴野なちインタビュー

# パイプオルガンのような、 彼女の音色

取材・文／高倉文紀

晴野なち（はるの・なち）

2004年6月14日生まれ 埼玉県出身

＜晴野なち写真＞  
撮影 Koichi Miura

↑ いろんな面を持っていて、  
どれが本当の晴野なちなのか、まだわからない ↓

女優やモデルの魅力は、楽器の音色にたとえることができる。クラリネットのように透明感と軽やかな存在感が印象的な女優、フルートのようなやわらかさと優しさを感じさせる女優、アコースティックギターのように繊細で癒やしの魅力を持った女優……。

晴野なちは、パイプオルガンの音色に似ている。その純粹で素直なキャラクターは、音符が澄み渡った空気の中を駆け巡るかのようなパイプオルガンの荘厳な音色に通じる。ときには『アルビノーニのアダージョ』のように叙情的で切なく、ときにはバッハの『トッカータとフーガ ニ短調』（ともに誰もが1度は聞いたことがあると思われるパイプオルガンの代表曲）の第1小節目のように力強く、1つの楽器で多彩な音色と音量を表現できる点も、さまざまな表情を見せる晴野に似ている。担当マネージャーは彼女について、「いろんな面を持っていて、どれが本当の晴野なちなのか、まだわからない」と評している。

## ＋ 木登りは、今でもします。 ＋

女優として活動をスタートすることになったときに、晴野はインスタグラムも始めた。担当マネージャーが「なんでもいいので日常の自分を切り取った写真を載せてほしい」と依頼したところ、彼女がインスタに投稿したいくつかの写真の中には、彼女自身が木登りをしている写真が含まれていた。しかも、それは「子供の頃に木登りをしている写真」ではなく、高校生になった現在の彼女が木に登っている写真だったので、マネージャーは驚いたという。

「木登りは、今でもします。川にも入ります。おばあちゃんの家が自然の多い町にあるので小さい頃から川遊びをよくしていて、活発でした。私はプリクラを撮るよりも友達と遊ぶほうが好きですが、まわりにはプリクラを撮るために遊びに行く友達が多くて、『私とは感覚が違うな』とったりします。

人見知りは、しないです。学校では、うるさいんじゃないかなと思う、ではなくて、間違いなく、うるさいです(笑)。

部活は陸上部のマネージャーをやっていますが、走っている選手に、行け、行け!と元気いっぱい声を出してます。陸上部のマネージャーは、運動している人を応援したかったので入部しました。母も同じ高校の出身で、高校時代は陸上部の選手だったそうです。

家では、学校にいるときより、もっとうるさくしてます。親から『どうして、そんなに元気なの?』と言われます」



## ↑ 事務所に入ってわずか10日後に… ↓

晴野は、2020年に設立された所属事務所「ブリングス」の新人募集に応募して、今年1月から活動を開始した。事務所に入ってわずか10日後に、映画『砂のフォトグラフ』の撮影に参加。主人公・若田部あやめの少女時代を演じた。また、オーディションで選ばれ、韓国のシンガーソングライターThe Black Skirtsの日本デビュー曲『EVERYTHING (Japanese Ver.)』のミュージックビデオ (King Gnuの常田大希氏が主宰するPERIMETRON所属の映像ユニットMargtが制作を担当) にヒロイン役で出演した。



The Black Skirts「EVERYTHING (Japanese Ver.)」MV  
[Bside 公式チャンネルからみる!](#)

「小さい頃からテレビの中の人に憧れてはいたんですけど、自分でやりたいと強く思ったのは中学2年生のときです。ドラマ『チアダン』を見て、だんだん心を開いていく役を演じた山本舞香さんの演技に惹かれて、私も人を感動させることができる女優さんになりたいなど。自分で探していく中で、ブリングスという事務所を立ち上げたという記事を見つけて、マネージャーさんの『新しいメンバーと始めたい』という言葉

読んで、自分にぴったりだと感じたので、ここしかない、この事務所に入りたいと思いました。

最初は父が芸能界入りを反対していましたが、私が『うまくいかないこともあるかもしれないけど、それを覚悟した上でやりたいから応援してほしい』と伝えると納得してくれました。

映画の撮影は、撮影場所に向かう車の中でも何回も台本を読んでドキドキしていましたが、明るくて活発で性格が自分に近い役だったのでホッとしました。リハーサルを何回かやっているうちに『こういう感じなのかな』とイメージできるようになってきました。

ミュージックビデオのオーディションでは『自分が一番得意な喜怒哀楽の表現は?』と聞かれて、私は『悲しいです』と答えました。今まで見ていた映画やドラマが感動する作品が多かったので、自分が一番わかる表現は悲しいときの演技かなと思ったので。絵コンテや役の設定をいただいてから、『この子はどんな女の子なんだろう?』とずっと考えていたので、撮影本番はその女の子になったつもりでやっていました。ずっと緊張していた映画の撮影とは違って、ミュージックビデオはずっと楽しかったという記憶があります」



## 「習い事の中で、一番長く続けているのがピアノです」

ピアノ歴は10年で、6歳に始めて現在も続けている。プライベートの時間で楽しんでいることを聞くと、「料理」と答えてくれた。散歩やパン屋さん巡りも好きだが、それには理由があると言う。

「習い事の中で、一番長く続けているのがピアノです。自分の気持ちを表現する1つの手段としてピアノに触ることもあれば、テレビなどで聞いたことがある曲を弾くのも楽しいです。ピアノを弾くときに、暗い音楽は体を丸めて弾いてみたり、逆に跳ねるような曲だったら大きく体を使って楽しそうに弾いたりするので、気持ちの作り方がちょっと演技に似てるなって。

趣味は、料理です。土曜日には家族みんなの夜ごはんを作ったりしますが、メニューを考えている時間が楽しいです。ごはんを作らない日も、

電車で通学中にけっこう長く時間があるので、窓から外を見て『このメニューいいな』と思ったりします。

散歩やパン屋さん巡りは、歩くことが好きというよりも、お母さんと一緒に行って、家にお父さんやお兄ちゃんがいるときとは違って2人で女子だけの話ができるのが好きです。『将来、家を建てたら2階にお母さん住んでいいよ』とか、そういう架空の話が楽しい(笑)。



小さい頃は粘土作りに熱中したり、昔からものを作るのが好きで、どういふふうにするかを考えるのも好きです。今は文化祭シーズンで、高校の私のクラスはジェットコースターを作るんですけど、作る前に『こういうふうにしたら走るんじゃない?』『外装をこの色にしたほうがかわいいんじゃない』といった話をしているときのほうが楽しいなって。

文章を書くことも好きです。私はメールよりも、手紙のほうが好き。手書きの文章が好きで、ペンを持つのが好きなので、メモもスマホに入れるよりも手で紙に書いて持っている方が好きです。日記を毎晩眠る前に書いてますが、それも紙の日記帳に書いてます」

## ＋ 正義感が強いとまわりからよく言われます ＋

インタビューに答える晴野は、おとなしいというわけではないが、言葉を砂の中から拾い上げながら話すかのように、ゆっくりと考えながら、静かに話す。しかし、一方では内面に芯の強さを秘めているようだ。その静と動のギャップの意外性が彼女の魅力でもある。



「あまり言葉にはしませんが、つねに自分の中で強く思っていることはあって、白黒はっきりしたい性格です。自分でも、力強いと思います。中学の時は生徒会の役員をやっていましたが、正義感が強いとまわりからよく言われます。

嘘は嫌い。小さいことと言えば、小学生や中学生の頃は計算ドリルの宿題を答えを丸写しして提出する人がいますが、そういうのは嫌いです。年上の人だろうが、自分よりも強い相手だろうと、間違っていることを言っていると許せなくて『それは違うよ』と言っちゃいます。

今は学校もお仕事も、家族といる時間も全部が楽しいです。17歳という年齢を色であらわすと、黄色です。でも、ずっと楽しいかというところでもなくて、ちょっと紫色のときもあります。私自身も『なちって、黄色だよ』と言われます。好きな色はピンクです。ピンクはあたたかいイメージがあるので、本当は『ピンクっぽい』と言われたい」

## ┆ 自分も人を感動させられるような役者になりたい ┆

「演じることは、自分自身が持っていない違う視点で見ることができるのが楽しい」と彼女は言う。

「事務所に入るまでは、学校でも演劇とかをやったことはなかったです。でも、『チアダン』を見ていて自分も女優になりたいと思ったときに、セリフを紙に書き出して全部をマネしていました。

今は家で映像作品をたくさん見て、演技をマネした映像を事務所のマネージャーさんに送ってます。このあいだまでは女優さんたちの演技を

そのままマネするというところだけに意識が行っていましたが、マネージャーさんから『自分の表現でいいんだよ』と言われて、それからは自分だったらどう演じるかを考えてやってみることにしています。『ちょっとこれは違うな』と思ったときには何度も撮り直して、1時間以上経っていることもあります。時間を忘れるくらいに、その作業が楽しいです。

感動させてもらって憧れた世界なので、自分も人を感動させられるような役者になりたい。私も作品を見ることで背中を押してもらうことがあるので、誰かの背中を押してあげられるようになれたらいいなって。

将来は、お母さんのように、やさしくて、ほかの人に対しても一生懸命になれる人になりたいと思います」





同世代の大多数が失ってしまった「少女感」と、ぶれない「自分らしさ」、アナログな指向性を秘める彼女は、「非等身大系クラシカルヒロイン」の魅力を持っている。

すぐれた女優は、テレビの画面や映画のスクリーンに姿が映し出されただけで、その場の空気を変えることができる。晴野なちも、彼女がそこにいるだけで、いつかどこかで見た懐かしい青空のような情景が、イメージの中に広がる気がする。

ドラマ・映画・CMの作り手の中には、彼女のような存在を探している人が少なくないはずだ。



## 取材・文／高倉文紀

美少女・女優評論家。雑誌『日経エンタテインメント!』、Web『タレントパワーランキング』などで女優・女性アイドルを中心に取材・評論を手がけるほか、『日刊ゲンダイ』などの雑誌・新聞・Webにコメントを提供している。